

総合計画審議会の設置にあたって



目次

0 1 佐賀市総合計画審議会について

0 2 計画策定の背景について
(人口構造の変化と発想の転換)

目次

01 佐賀市総合計画審議会について

02 計画策定の背景について (人口構造の変化と発想の転換)

総合計画とは



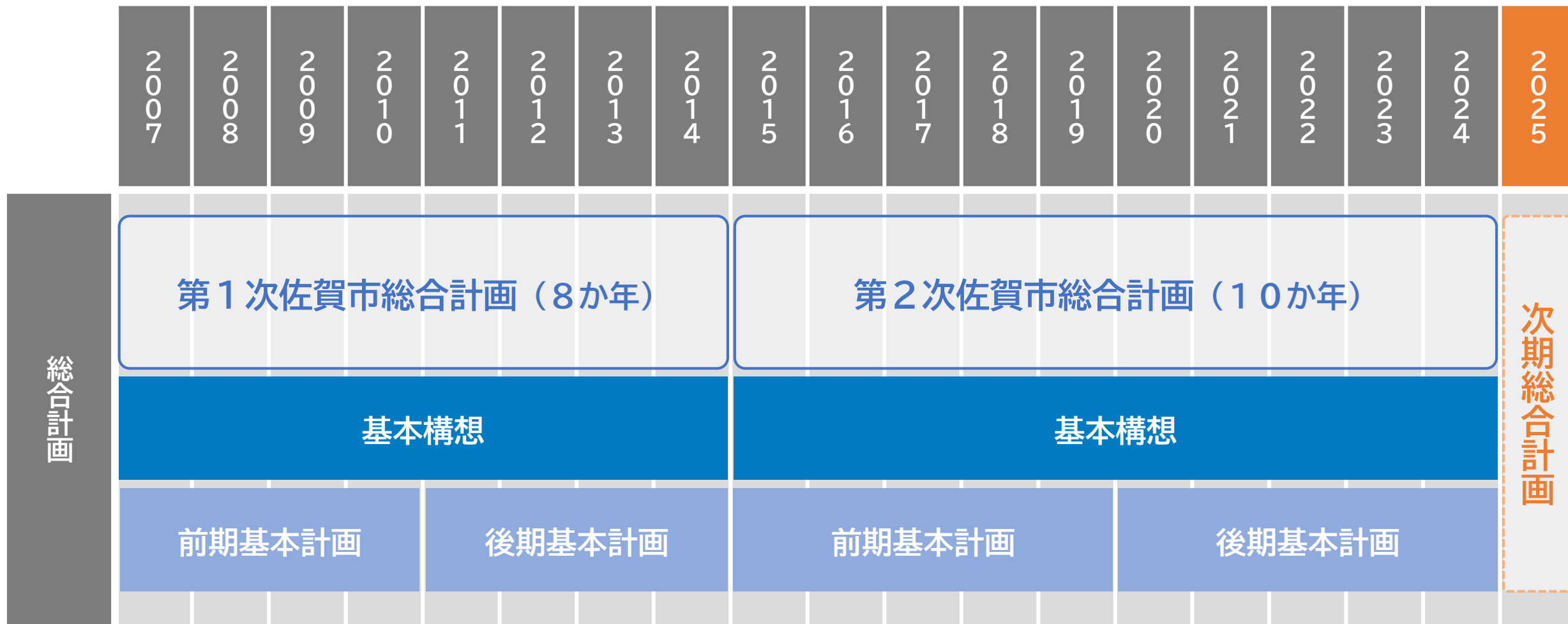
▲第2次佐賀市総合計画（現行計画）

- 佐賀市の「まちづくりの指針」となるもので、本市の最上位計画に位置付けられるもの
- 市のめざす将来像を示した基本構想、構想を実現するために実施する基本的な政策や施策を示した基本計画で構成

現行総合計画の計画期間

ポイント

- 現行計画である第2次佐賀市総合計画は、令和7年3月で計画期間が終了
- 現在、新たな第3次佐賀市総合計画の策定に着手



総合計画審議会とは

ポイント

- 次期総合計画について、市長の諮問に応じて、調査・審議していただく場
- 教育や福祉・産業・環境などの各分野において、今後必要となる取組の方向性などについて、議論や意見などをいただくもの



目次

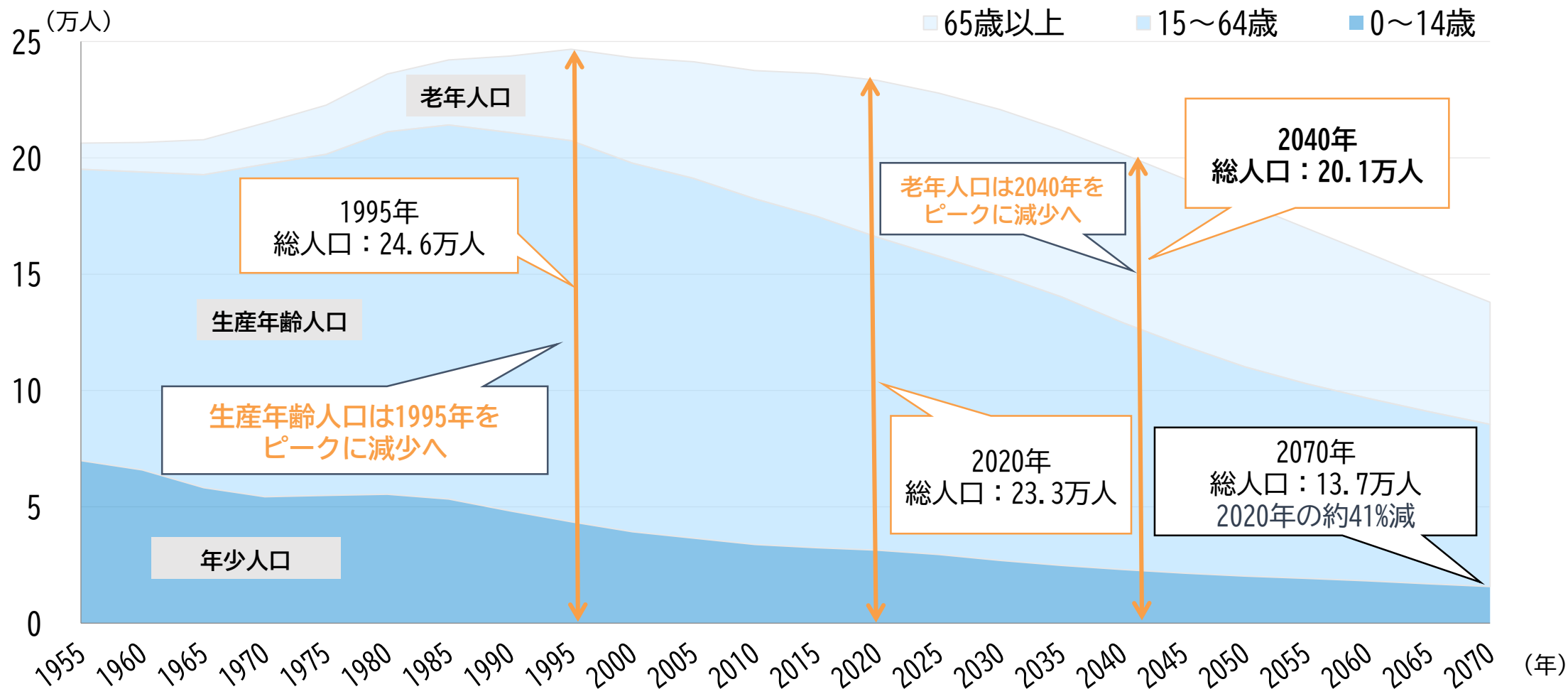
01 佐賀市総合計画審議会について

02 計画策定の背景について
(人口構造の変化と発想の転換)

人口構造の変化と推移（将来推計人口）

ポイント

- 総人口は2040年に20.1万人と、2020年（23.3万人）比で14%減になると推計
- 年齢区分別では老年人口は増加を続けているものの、2040年にはピークを迎え減少へ転じる。



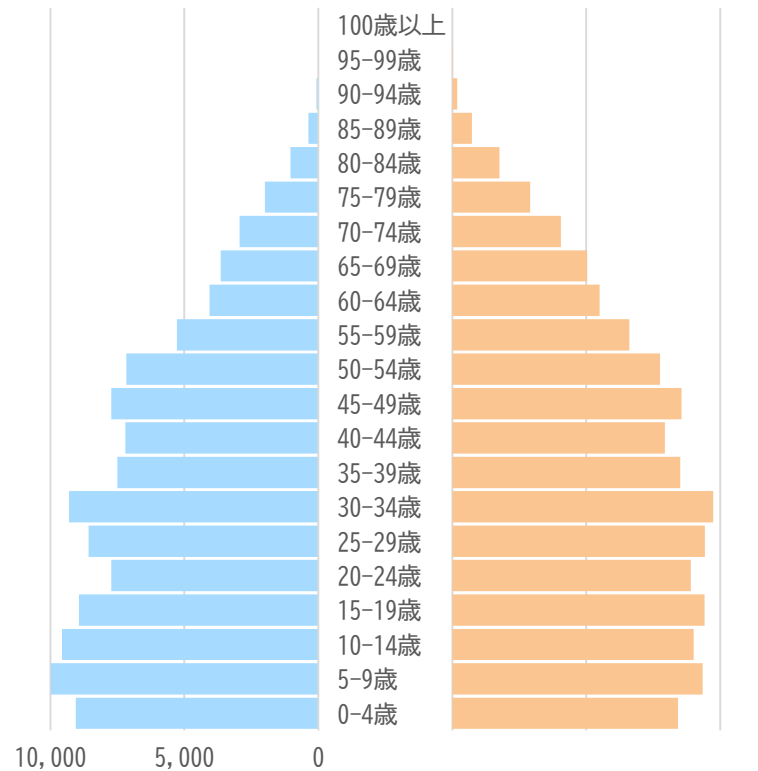
将来の人口構造等の展望（人口ピラミッド）

ポイント

- 2040年には団塊ジュニア世代が65歳以上の高齢者となる。
- 人口の総量が減ると同時に人口構造が変化し、生産年齢人口約2人で1人の老年人口を支える構造（2020年）から、約1.46人で1人を支える構造となると推計

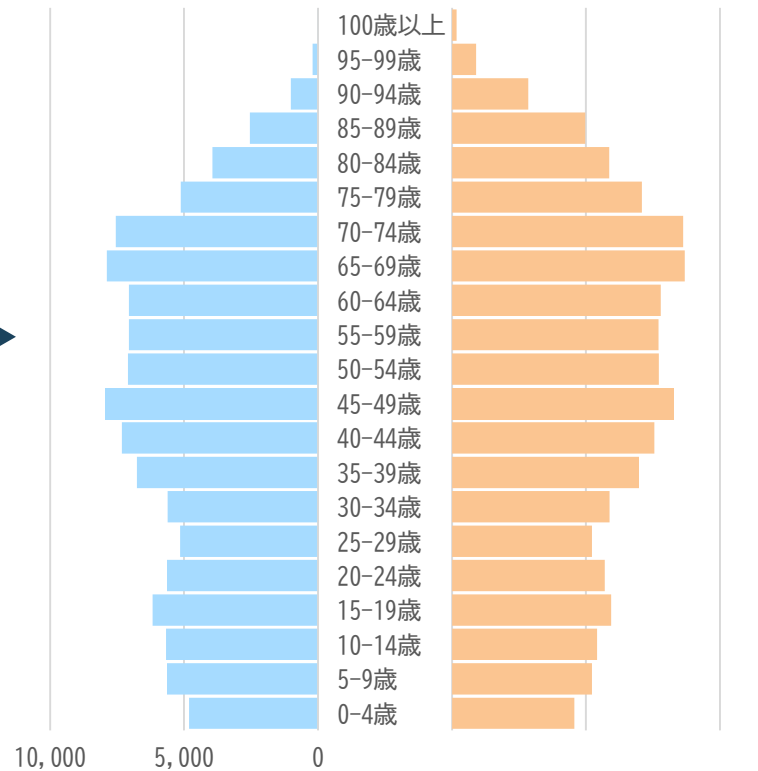
1980年

■男性 ■女性
0 5,000 10,000



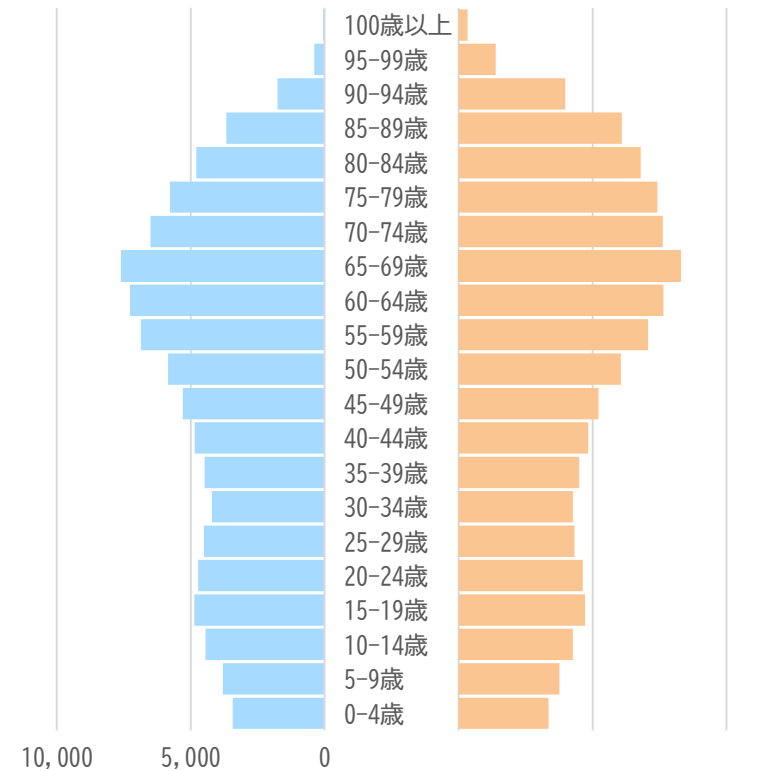
2020年

■男性 ■女性
0 5,000 10,000



2040年

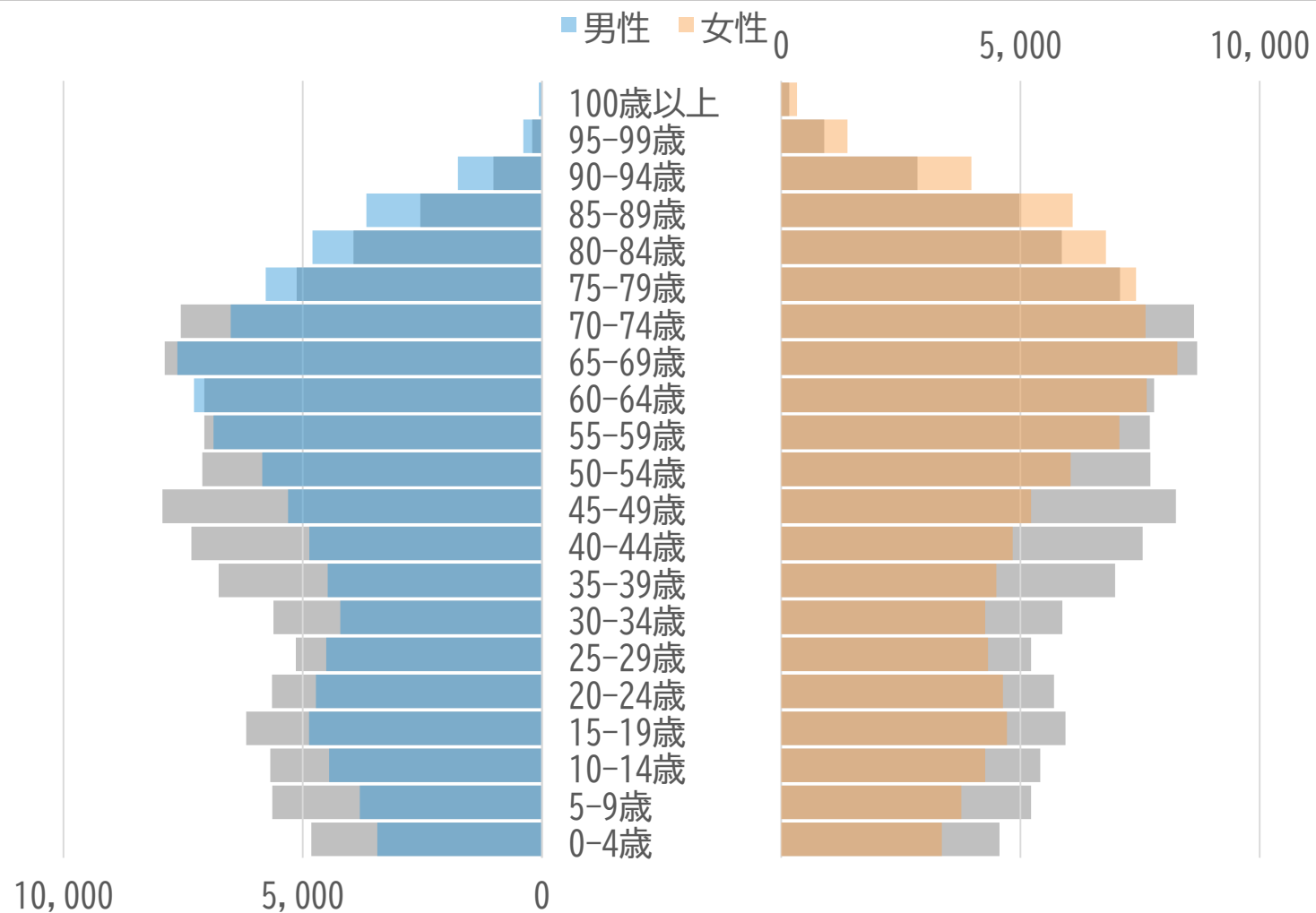
■男性 ■女性
0 5,000 10,000



将来の人口構造等の展望（人口ピラミッド）

ポイント

- 2020年と2040年の人口ピラミッドを重ねると、老年人口が増加し、生産年齢人口・年少人口が減少することが分かる。

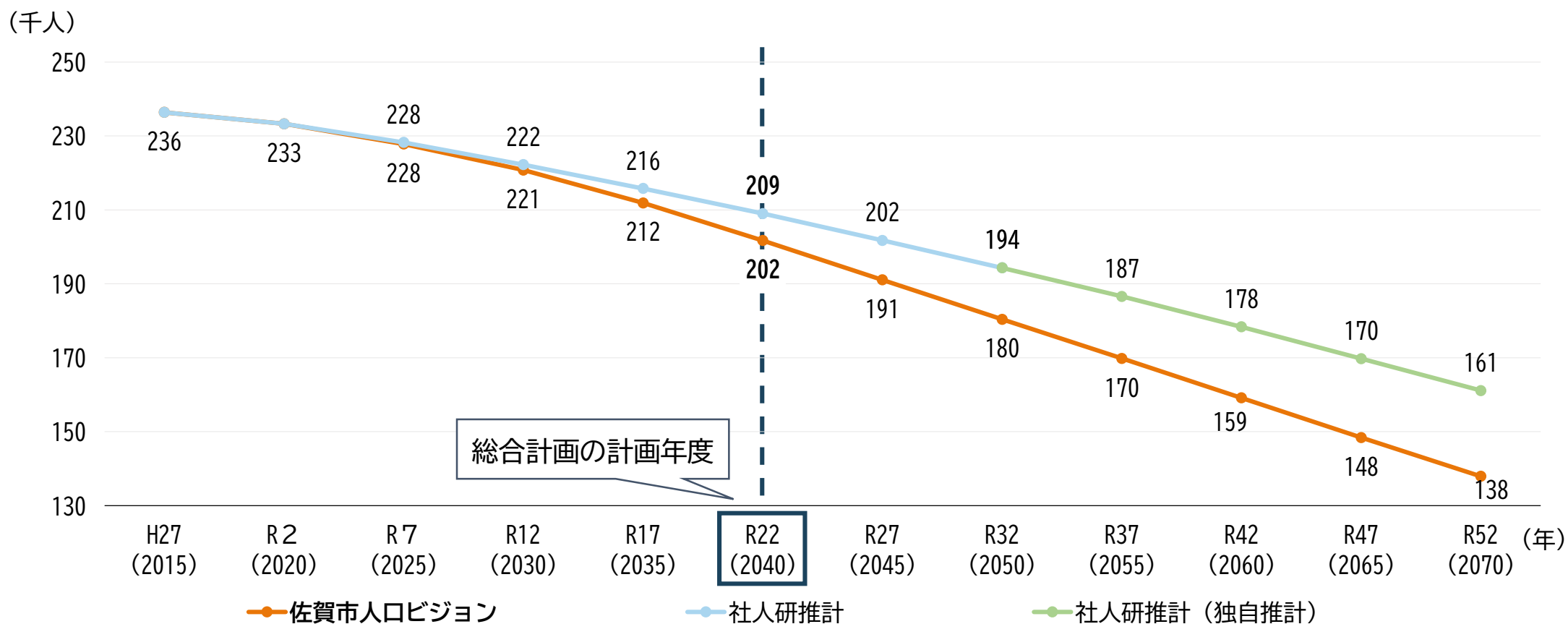


グレー | 2020年
カラー | 2040年 (推計)

人口構造の変化と推移（社人研推計との比較）

ポイント

- 佐賀市人口ビジョン（R4年度）と国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口（R5年度）の将来推計人口を比較しても、市の人口は減少傾向にあることは変わらない。
- 国立社会保障・人口問題研究所の推計の方が、人口の減少率は緩やか

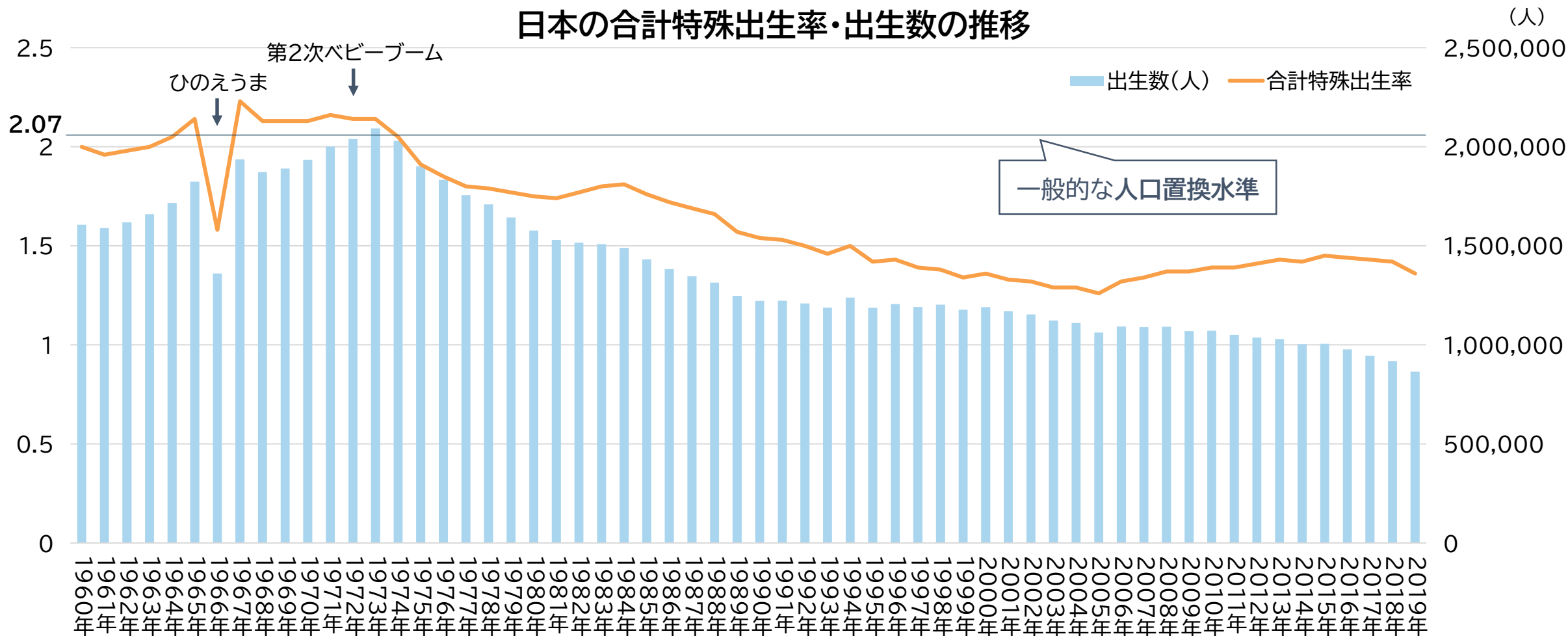


出典 | 佐賀市人口ビジョン（令和4年度）
国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（令和5（2023）年推計）」
※R32以降の推計値は、社人研推計の条件を変えずに市が独自に推計したもの

人口構造の変化と推移（日本の合計特殊出生率）

ポイント

- 我が国の合計特殊出生率は、第2次ベビーブーム期（1971年-1974年、2.14程度）を最後に、50年間は2を下回っており、直近では1.36となっている。



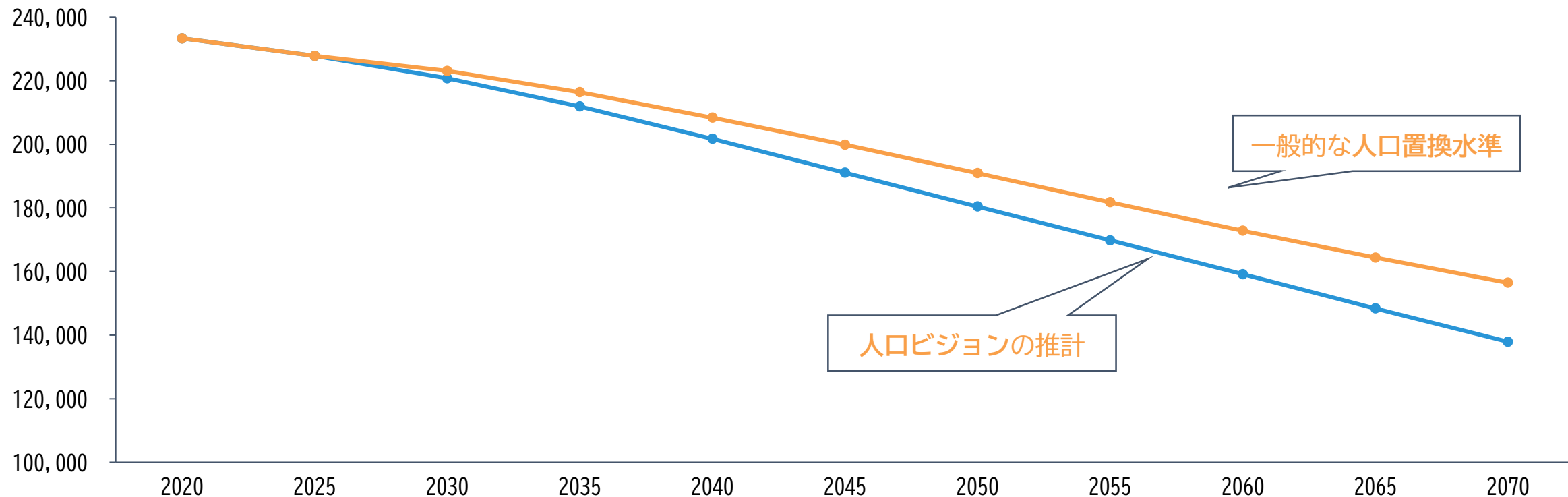
人口構造の変化と推移（出生率シミュレーション）

ポイント（速報値）

- 仮に出生率が、人口が将来にわたって増えも減りもせず、親の世代と同数で置き換わる水準（＝人口置換水準、2.07）まで上がっても、一定期間は人口減少が続く。
- 現在の人口水準を維持するためには、3.9程度の出生率が必要

佐賀市人口ビジョンにおける出生率のシミュレーション

● 出生率 1.61 ● 出生率 2.07



人口構造の変化と推移（人口置換水準について）

なぜ、出生率が人口置換水準まで上がっても、人口が減少し続けるのか？

前提：人口を維持or増加する条件

出生数 ≥ 死亡数

※自然増減のみを鑑みた場合

佐賀市の場合…

既に少子・高齢化が進んでおり、
高齢者の割合が多く生育年齢の人口の割合は少ない。

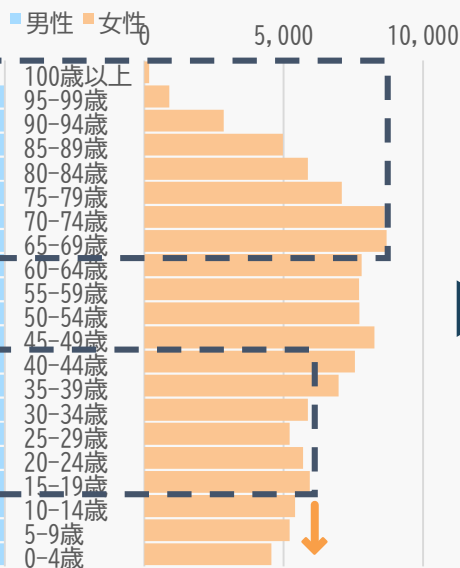
人口置換水準を達成した場合でも…

- 生育年齢の割合が少ないため、**高齢者の数を「置換」できない。**
- **高齢者割合が一定水準まで下がるまでは、人口減少が続く。**

人口置換水準（出生率2.07）を達成した場合の人口ピラミッド

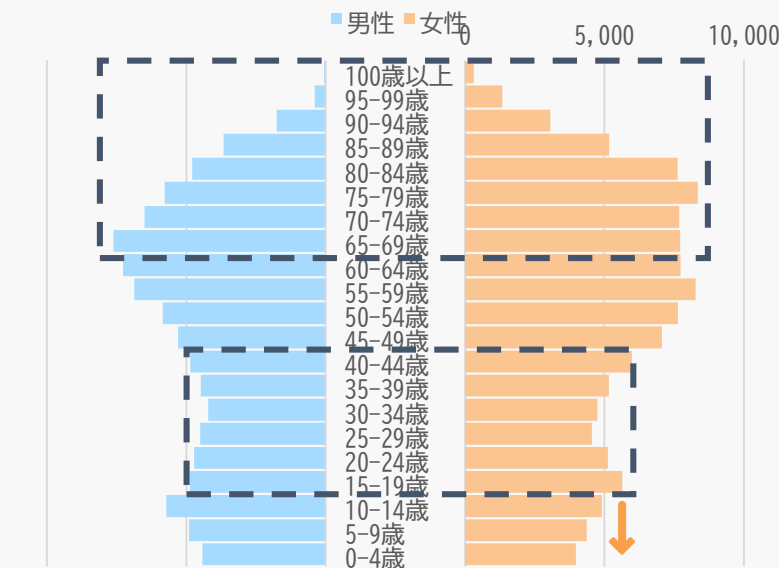
出典 | 佐賀市人口ビジョン（令和4年度）から推計

2020年



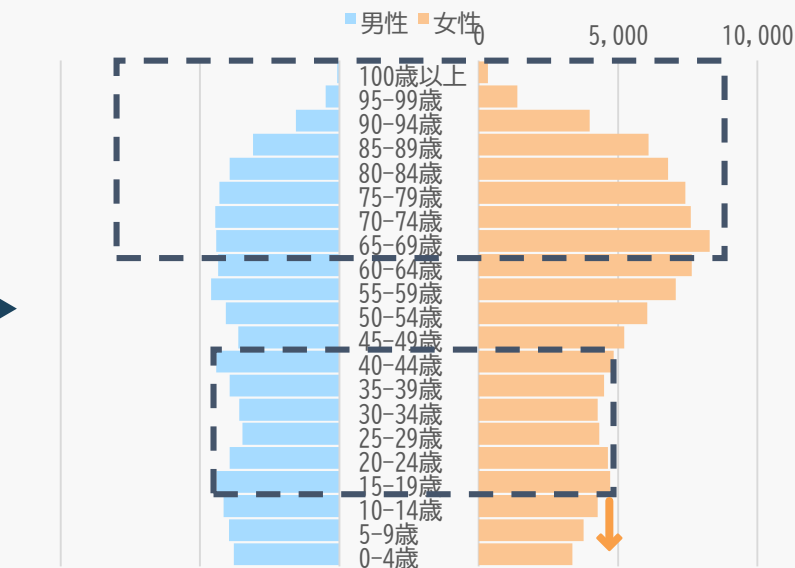
既に高齢者割合（団塊世代）が多い

2040年



団塊ジュニア世代が高齢者となる

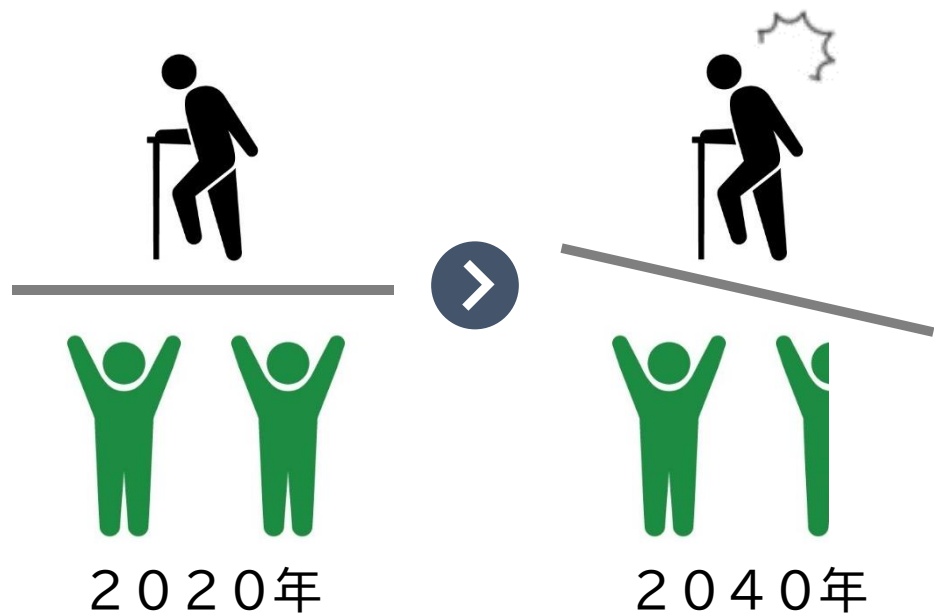
2070年



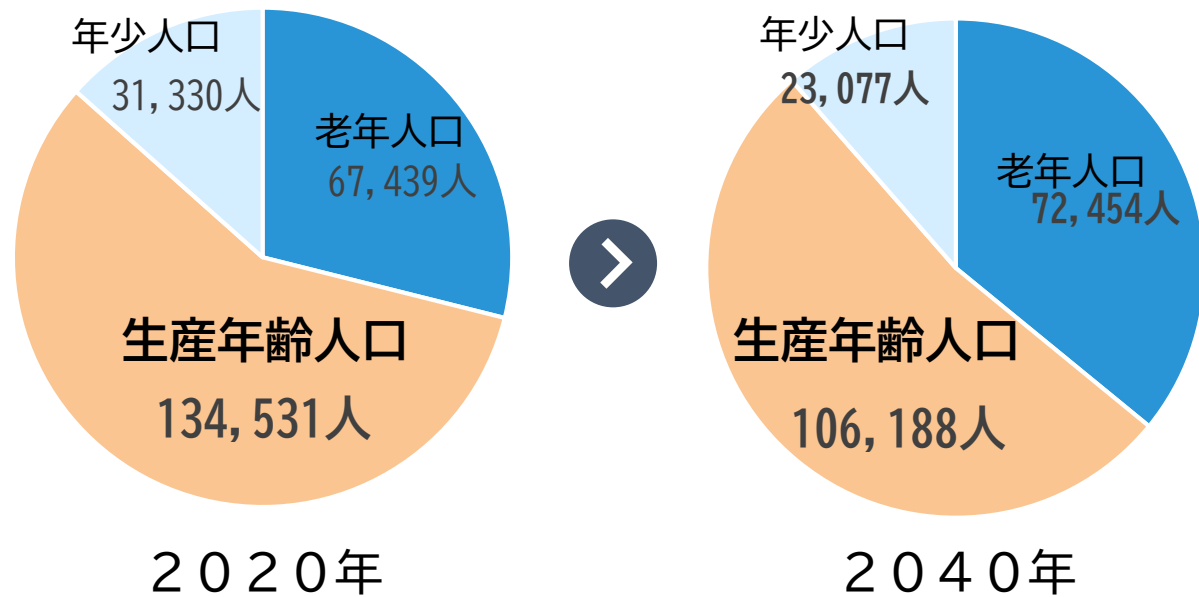
依然、高齢者割合が多く
人口減少は続く見込み

将来の人口構造等の展望（2040年に予想される変化）

高齢者が増え、それを支える若者が減る



働く人の減少が加速する



将来の人口構造等の展望（2040年に予想される変化）

そのほかにも…



地域

- 地域のつながりの希薄化
 - 空き家の増加
- ↓
- 佐賀市の強みである「地域のつながり」を磨く取組が重要に



健康

- 高齢者率の増加
 - 医療費や社会保障負担の増加
- ↓
- 健康増進に向けた取組がさらに重要に



経済

- 需要全体が減少し、経済規模が縮小
- ↓
- 規模の経済だけに着目せず、経済循環を高めたり、商品の付加価値を高めたりすることが重要に



個人

- 人口が減ることによって、一人ひとりの希少価値が相対的に高まる。
- ↓
- 一人ひとりの成長や担う役割に着目することが重要に

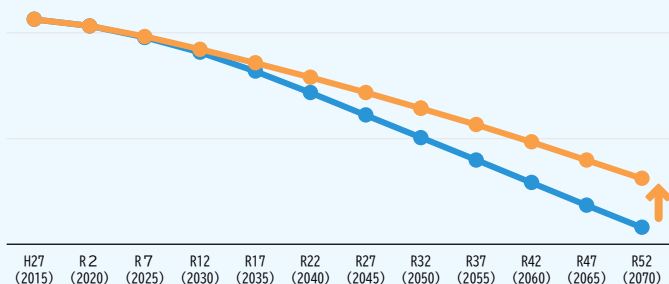
人口減少に対する考え方

人口推計

- 市の人口ビジョンや国立社会保障・人口問題研究所は、市の人口減少や人口構造変化を推測
- 特に2040年には、団塊ジュニア世代が65歳以上の高齢者となり、人口構造の変化が顕著
- 仮に出生率が回復したとしても、人口減少は止まらず、ある程度の人口減少は防げない。

人口減少は避けられない未来と認識し、
「少子化の課題」と「人口減少による課題」は切り分けて考える

01 政策を打つことで改善する。
(人口減少の幅を上向かせる。)



02 「発想を転換」した
まちづくりを推進する。



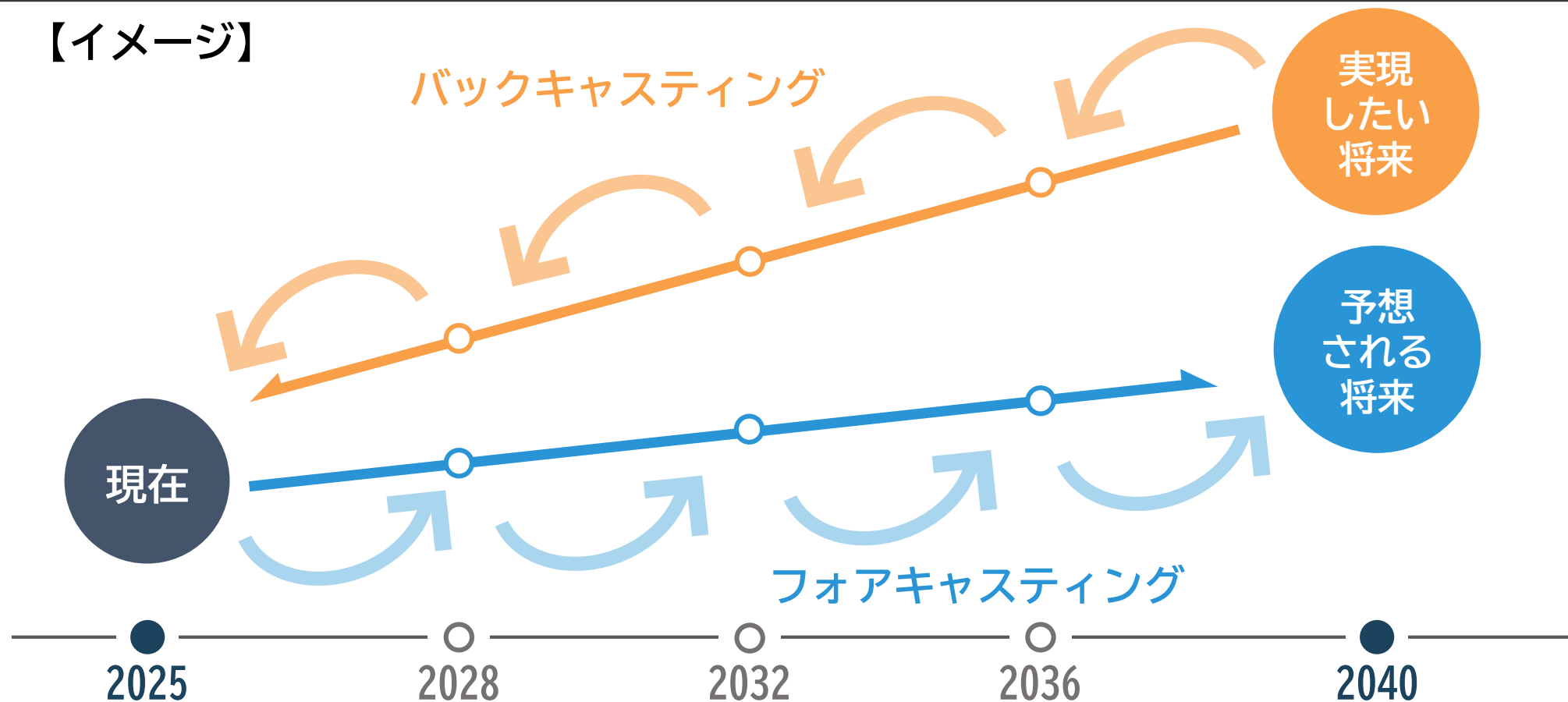
➤ 2040年の将来に向けて、何を行うべきかというバックカスティング思考で取り組む。

バックキャストの発想

ポイント

- 人口減少局面では社会全体が縮小することが想定されることから、実現したい将来に向けて、各時点において何をしなければならないのかという「バックキャスト」の考え方が必要
- 現行計画と同様、過去からの課題の積み上げを行う「フォアキャスト」の考え方に加え、これまでになかったバックキャストの発想をもって計画策定を行う。

【イメージ】



第2章 人口ビジョン | 将来の人口構造等の展望（発想の転換）

高齢者が増え、それを支える若者が減る



人口減少を踏まえた発想の転換



転換の内容

- 未来を担う子どもや子育て世帯を社会全体で支える構造への転換
- 健康増進等により、元気ではたらく意欲のあるひとは活躍できる就労環境 等

将来の人口構造等の展望（発想の転換）

高齢者が増え、それを支える若者が減る

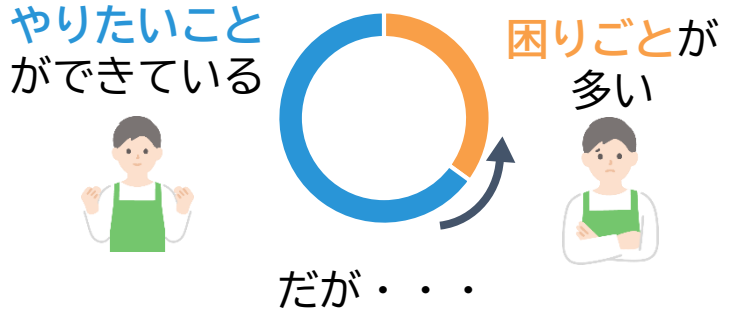


「気づきの処方」の連鎖

気づきの処方

気づきの連鎖

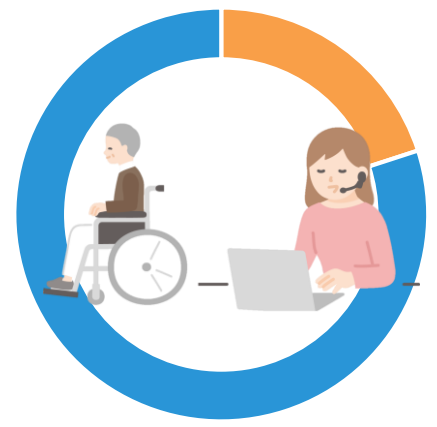
人はやりたいことができていると、
生きやすくなる



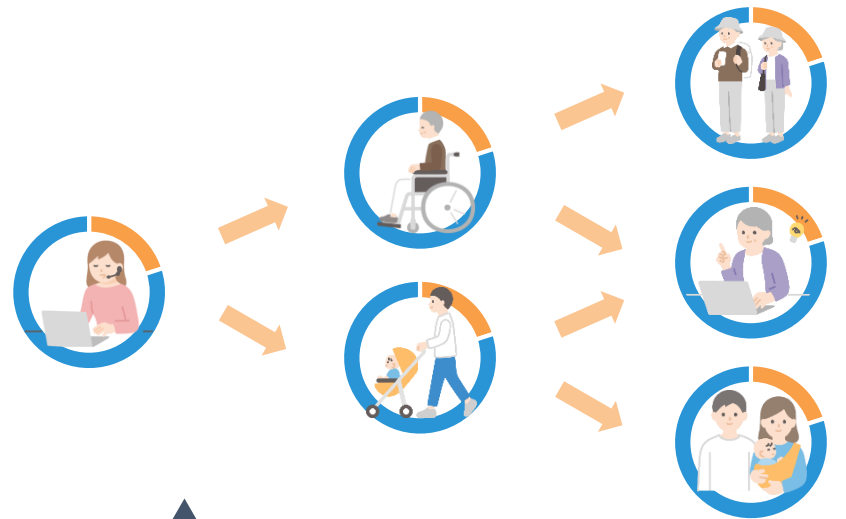
高齢者や障がい者には、
困りごとばかりだという先入観



できることの限界を
社会が勝手に
決めている



全盲の方もPCを使える
車いすでも動き回れる
困りごとを克服する術を
知っている



困りごとを解決して生活する人を地域社会で
目にすれば、その困りごとってなんとかなるんだ
と周りが気づき、認識や対応も変わる

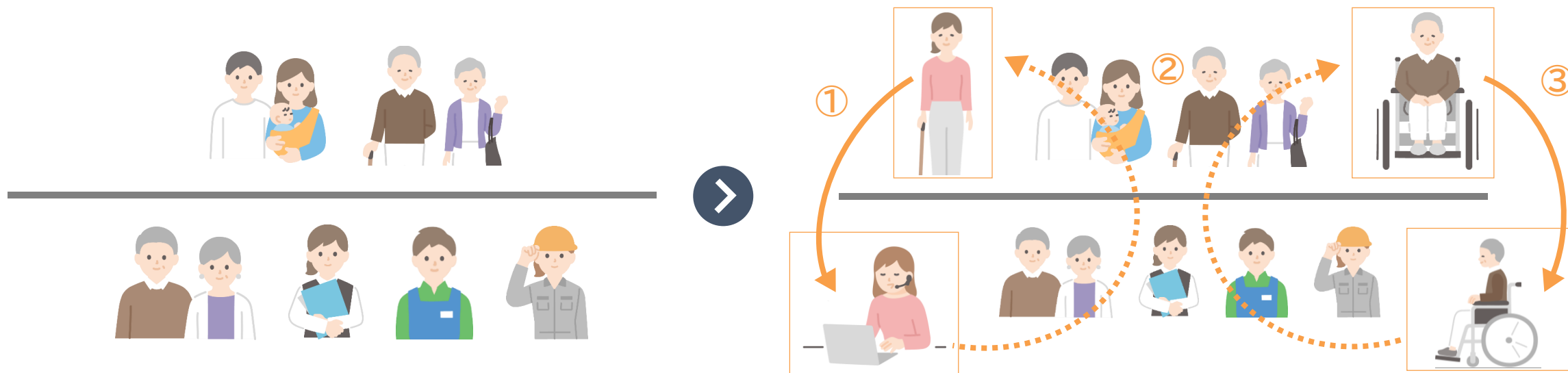
➤ 困りごとを減らしながら、やりたいことができることを
社会の中で気づきやすくすることで、生きる希望が湧く社会へ

将来の人口構造等の展望（発想の転換）

高齢者が増え、それを支える若者が減る



「気づきの処方」の連鎖で、みんなが生きやすくなる



- ① 本人が困りごとを克服する術に気づく機会を創る
- ② 社会が困りごとを克服できると気づく
- ③ 全員がやりたいことに取り組める



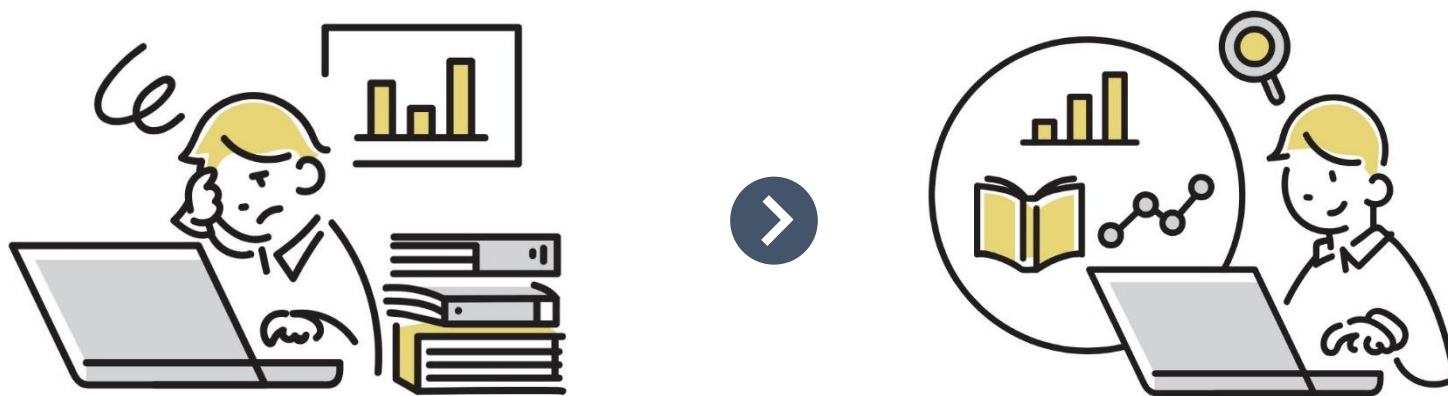
みんなそれぞれが、生きやすい社会になる

将来の人口構造等の展望（発想の転換）

働く人の減少が加速する



生産性向上や多様な働き方へ発想の転換



- AI等の最新技術やデータを活用することによる生産の自動化や情報の可視化・誘導
- 働く人に光を当て、自分らしい働き方ができるような社会の構築